

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 28 日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770259

研究課題名(和文)清代東トルキスタンにおけるトルファン郡王家の位相と役割

研究課題名(英文)The position and role of Turfan junwangs in Eastern Turkisitan under the Qing rule

## 研究代表者

小沼 孝博 (Onuma, Takahiro)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30509378

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、清朝統治下の東トルキスタンにおいて特権的な地位を獲得したトルファン郡王家に焦点をあて、その具体的な役割を明らかにすることにより、オアシス統治の実態の解明をめざした。彼らは清朝政権の一端に組み込まれ、それに追従することで台頭した眷族であったが、同時にオアシス社会で独自に権力を行使しえる政治空間の構築と拡大に積極的であった。その過程でライバルを排除し、利権を掌握し、また自らの立場とその正当性を説明するロジックさえも獲得していった。本研究の結果にもとづけば、清朝統治下であっても、オアシス・レベルの通商・外交・水利などを差配する権限は、通常彼らの掌中に握られていたと想定できるのである。

研究成果の概要(英文)：This research project, focusing on the Turfan junwang families, who held a privileged position in Eastern Turkistan under the Qing rule, and their actions and role, intends to clarify the actual practice of control and administration over oases. The Turfan junwangs were absorbed into and followed the Qing government, and thus succeeded to gain power. However, at the same time, they tried to construct and enlarge the political space to exercise power on their own. In the process, they excluded their political rivals, hold various rights in local society, and even created a logic to explain their position and the legitimacy in Qing Xinjiang. Based on the results of this research project, we are able to have an outlook that, in normal circumstances, they took hold of the rights to manage caravan trade, diplomacy, water distribution at oasis level.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：新疆 東トルキスタン トルファン 清 郡王 カシュガル 隊商 中央アジア

### 1. 研究開始当初の背景

ユーラシア大陸中央部に位置する東トルキスタン(中国領中央アジア、現在の中国新疆ウイグル自治区南部)のオアシス地帯は、18世紀中葉に清朝(1636-1912)の支配下に入った。清朝による征服は、それまで政治的・宗教的権威を誇ったイスラーム神秘主義教団の指導者一族カシュガル=ホージャ家を駆逐する一方で、新たなムスリム支配者層を生み出すことになった。その最も代表的な存在が、清朝の征服活動に貢献したエミン=ホージャ(1684/5-1777)を始祖とする「トルファン郡王家」である。

歴代トルファン郡王は、モンゴル首長層と同様に「外藩」王公の待遇を得て、清朝皇帝に忠実な臣下として清朝政権に参加し、天山東部のトルファン盆地に有する王領を世襲的に支配した。さらに東トルキスタンの主要オアシス都市カシュガルの行政長官たるハーキム=ベグの職を歴任し、清代東トルキスタンにおけるその特権的な地位は従来から指摘されてきた。一方で、エミン=ホージャの祖父・父はともにアホン(イスラームの教長)であり、19世紀後半に記されたイスラーム史料では、その家系は16世紀の聖者ムハンマド=シャリーフに連なるとされている。実際の支配の場においても、歴代郡王はムスリム住民に対して「イスラームの王」として君臨し、モスクやマザール(聖廟)の修建など様々な事業を行っていた。

このような研究動向の下、本研究課題の研究代表者である小沼は、研究開始当初の段階で、郡王家の成立について基礎的な考察を試み、元来清朝への避難民を率いる一頭目ではなかったエミン=ホージャが、東トルキスタン征服を視野に入れ始めた清朝によってその存在を見いだされ、清朝のムスリム支配のための「モデル」として権限を付与されていたことを指摘していた。また若手研究(B)の研究課題「清朝治下の東トルキスタン・オアシスにおける文書行政と支配構造」(平成22-24年度)に取り組み、オアシス域内の事案を処理する際に起草された地方行政文書の調査と研究を遂行していた。そして、その検討を通じて、トルファン郡王が務めるハーキム=ベグが、清朝大臣が関与しえぬ在地ネットワークと結びついた行政・外交空間を構築しており、コーカンド=ハーン国側も清朝大臣ではなくハーキム=ベグをカシュガルの実質的な為政者と見なしていた、という予見をもつに至った。

このように、トルファン郡王家は清朝権力と在地社会を結節する重要な位置にあり、彼らの政治・社会・文化的活動に着目することは、18-19世紀の東トルキスタンにおける清朝統治の実態、およびそのもとでのオアシス社会・イスラーム社会の具体像を解明する上で、極めて有効な視点となると考える。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、清朝統治下の東トルキスタンにおいて特権的な地位を獲得し、清朝権力と在地社会を結節する重要な位置にあったトルファン郡王家に焦点をあて、その位相と活動を具体的に明らかにすることにある。特に歴代郡王が有していた、東トルキスタンの主要オアシス都市であるヤルカンドやカシュガルに駐在する行政官としての側面に注目する。そして、トルファン郡王のオアシス統治に関わる事蹟、対外交渉、そしてイスラームとの関係を、多言語史料を用いて総合的に検討することにより、18-19世紀の東トルキスタンにおける清朝統治の実態、およびそのもとでのオアシス社会・イスラーム社会の諸相とその変容の解明をめざすものである。

### 3. 研究の方法

本研究は文献にもとづく歴史研究を基本的手法とするものであり、海外の研究機関に分散して所蔵される文献史料の調査・収集とその分析に力点を置く。調査を予定している主な研究機関は、トルコのアンカラ民族博物館、中国北京市の中国第一歴史档案館(以下、第一档案館)、ウルムチ市の新疆ウイグル自治区档案館(以下、新疆档案館)、ウズベキスタン共和国タシケント(民間所蔵文書)である。中国所蔵の関連史料の一部については、史料集として出版が予定されており、購入して作業効率を高める。

収集史料はただちに読解と分析を行い、研究目的に沿った事例研究を通じて、清代東トルキスタンにおけるトルファン郡王の行動と役割を明らかにする。また、取り組むべき事例研究の指標として、以下の三つを具体的な課題に設定した。

**郡王家の権限確立の過程：** 郡王家の始祖エミン=ホージャは清朝の遠征軍に参謀として従軍し、東トルキスタンの平定後、カシュガル=ホージャ家の拠点であったヤルカンドに駐留し、事後処理にあたった。清朝が統治体制の整備を急ぐ中での彼の言動が、トルファンに自領を持つ領主としてだけではなく、東トルキスタン全域における一族優勢の基礎を築いたと考えられる。外来のエミン=ホージャとヤルカンド土着の有力者との確執にも注目しつつ、郡王家の権威確立の過程解明を第一の課題とする。

**郡王家のカシュガル統治：** 歴代郡王の多くはカシュガルのハーキム=ベグ職を兼務した。特に注目すべきは、約23年間その職にあった第3代郡王イスカンドル(在位1779-1811)である。既に申請者は、イスカンドルが清朝内地の銀両と現地通貨との兌換率変更のために市場調査を実施したことを明らかにし、また水路掘削や対外通商に関与していた事実をつきとめている。長期にわたる

彼の事蹟を追うことで、18-19 世紀の東トルキスタン社会の諸相とその変容を明らかにする。

**イスラームとの関係：** 歴代郡王は現地ムスリム住民に対して「イスラームの支配者」として君臨していた。ただし現状では、現地住民の手による歴史叙述に残る郡王とイスラームとの関係に関わる記述は断片的である。そこで本研究では、カシュガル=ホージャ家唯一の生き残りであり、西トルキスタンで成長したサリムサクの存在に注目する。サリムサクは、1780 年代から故地奪還を目指してコーカンド=ハーン国領内で活動を開始した。この時に清朝皇帝の命を受け、サリムサク本人やコーカンド=ハーン国との交渉にあたったのが、上記のイスカンドルである。この問題に関するイスカンドルの言動を分析することは、郡王家とイスラームの関係を探る糸口になり、かつ「異教徒の王」たる清朝皇帝とイスラーム聖者裔との「対話」のあり方を知る興味深い事例になる。

研究成果の公表は、国内外の学会・研究会における研究報告と、学術論文の執筆という形態をとるが、広く研究者が情報を共有・共用できるよう、特に重要と思われる史料については、訳注を付した英文史料集として刊行を目指す。

#### 4. 研究成果

以下、具体的な研究成果について、先ず年度ごとの研究実績の概要を示したのち、上記の「研究手法」で示した ~ の課題に分けて、それぞれの達成度を整理する。そして最後に、研究成果にもとづく現段階での所見と今後の研究の見通しを簡単に述べたい。

##### (1) 年度ごとの研究実績

**1 年目** (平成 25 年度): 研究遂行の基礎となる史料の集積・分析に力点を置いた。とくに『清代新疆満文档案彙編』(全 283 冊)のうち 180 冊を購入し、エミン=ホージャやイスカンドルらトルファン郡王の事蹟に関わる記録の抽出と分析を進めた。その成果の一部として、清 - コーカンド=ハーン国との関係構築のプロセスと背景に関する共著論文 [雑誌論文] を執筆し、その外交交渉においてエミン=ホージャが交渉の仲介者となり、コーカンド側も対清交渉の窓口と見なしていた点を指摘した。また、アンカラ民族学博物館においてトルファン郡王関連テュルク語史料の調査を行い、あわせてファクシミリ公開の許可を得た。

**2 年目** (平成 26 年度): まず『清代新疆満文档案彙編』の未購入分 103 冊をそろえ、郡王家の権限確立の過程に関連する史料の集積・分析にあたった。その成果の一部は、当年度に刊行した『清と中央アジア草原』[図書] に盛り込むことができた。また、アン

カラ民族学博物館所蔵文書に関連する清朝史料の収集を第一档案馆などで行うとともに、アンカラでの調査概要を報告した [雑誌論文]。当初の計画では、当年度に新疆ウイグル自治区に赴いて史料収集とフィールド調査を実施する計画であったが、現地の政情不安からこれを断念し、3 年目に予定していたウズベキスタンでの民間所蔵文書の調査に変更した。なお、調査予定であった新疆档案馆所蔵のトルファン関連文書については、『清代新疆档案選輯』(全 91 冊)として刊行されたので、本研究とは別の経費で購入し、東北学院大学中央図書館に収蔵することができた。

**3 年目** (平成 27 年度): これまで実施してきた調査・研究を総合化し、学会発表と論文執筆に努めた [雑誌論文 ; 学会発表] (詳細は後述)。大きな成果としては、1 年目に調査したアンカラ民族学博物館所蔵文書を、シドニー大学の David Brophy 氏と共著の英文資料集 [図書] という形で、計画どおり刊行できた。一方、参加予定であった新疆ウイグル自治区における国際会議が中止となり、付随して計画していた現地調査も見合わせざるを得なくなった。

##### (2) 課題の達成状況

**郡王家の権限確立の過程：** 本研究において、最も充実した成果を得ることができた。郡王家の成立過程における重要な事件、すなわち 1732-33 年における甘肅瓜州地方への移住と、1756 年におけるトルファン帰還の経緯を詳述した [雑誌論文 ; 図書]。特に前者では、当該事件の経験・記憶が、のちの新疆統治の場でトルファン郡王家が示すことになる自己規定の思想的基盤を準備させたことを指摘した。1759 年以降のヤルカンド駐留時のエミン=ホージャに関しては、上述のように清 - コーカンド=ハーン国間交渉における役割を論じた [雑誌論文]。ヤルカンド土着の有力者との確執については、現在論文の執筆に向けて収集資料の整理・分析を進めている。

**郡王家のカシュガル統治：** 郡王家の対外通商への関与に注目して研究を進めた。新疆征服後、清朝政権は現地ムスリム商人の隊商交易に制限をかけていくが、その背後で新興のムスリム支配者は、任地オアシスの隊商交易に係わる権利を手中に収めていったことを明らかにした [雑誌論文]。また 1795 年のコーカンド使節との外交交渉を、当時のカシュガルのハーキム=ベグであったイスカンドルが主導的に取り仕切っていた点に注目し、清朝治下のカシュガル統治の実態を論じる英文論文を執筆した(近刊予定)。一方、水資源の確保と分配も、乾燥著しいオアシス社会において最も重要な行政任務の一つである。この点に関しては、本研究で調査したウズベキスタンの民間所蔵文書が 19 世紀前半のカシュガルの事例に言及しており、現在

関連史料の収集に努めている。

**イスラームとの関係：**この問題に関しては、予定していた新疆での現地調査が不調に終わったことも影響して、展望を含めた予備的考察〔雑誌論文；学会発表〕を提示するにとどまった。具体的な研究成果の発信は、将来的な課題として取り組んでいくことにしたい。

以上、いくつかの変更点や未達成の課題があったが、全体としては、事前に設定した研究目標にしたがい、おおむね研究計画どおり研究を遂行することができたと自己評価したい。

### (3) 研究の所見と今後の課題

本研究を通じて、これまで不明瞭であったオアシス統治の場におけるトルファン郡王家の役割について、かなり明確な具体像を提示することができた。彼らは清朝政権（帝国権力）の一端に組み込まれ、それに追従することで台頭した眷族であったが、同時にオアシス社会で独自に権力を行使しえる政治空間の構築と拡大に積極的であり、その過程でライバルを排除し、利権を掌握し、また自らの立場とその正当性を説明するロジックさえも獲得していった。本研究の結果にもとづけば、清朝統治下であっても、オアシス・レベルの通商・外交・水利などのマネジメントは、通常彼らの掌中に握られていたと想定できるのである。このような見通しが妥当であるか否かは、今後本研究でやり残した課題に取り組むなかで検証していく必要がある。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

小沼孝博、「中央アジア・オアシスにおける政治権力と隊商交易 清朝征服前後のカシュガリアを事例に」、『東洋史研究』、査読有、第75巻第1号、2016、1-34

小沼孝博、「トルファン・オアシス社会の分断 清とジュンガルの狭間で」、『世界の研究』、査読無、第244号、2015、1-14

小沼孝博、「アンカラ民族学博物館所蔵トルファン郡王家関連史料の調査」、『日本中央アジア学会報』、査読無、第11号、2015、61-71

Onuma Takahiro, “The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors,” *Saksaha: A Journal of Manchu Studies*, 査読有、vol.12、2014、pp. 33-48

DOI:http://dx.doi.org/10.3998/saksaha.13401746.

0012.004

Onuma Takahiro, Kawahara Yayoi, Shioya Akifumi, “An Encounter between the Qing Dynasty and Khoqand in 1759–1760: Central Asia in the Mid-Eighteenth Century,” *Frontiers of History in China*, 査読有、vol.9 (3)、2014、pp. 384–408

小沼孝博、「ヌサン使節の派遣 1757年における清とアブライの直接交渉」、『アジア文化史研究』、査読無、第14号、2014、1-20

小沼孝博、「江上波夫博士旧蔵《清代乾隆期科布多疆域図》」、『紀念王鍾翰先生百年誕辰學術文集編委會選編『紀念王鍾翰先生百年誕辰學術文集』（北京：中央民族大学出版社）査読無、2013、714-720

〔学会発表〕（計8件）

小沼孝博、「18世紀前半のトルファン—ジュンガルの東辺/清の西辺」、『2016年国際ワークショップ「ジュンガルに関する歴史研究最前線」』、京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）、2016年1月23日

Onuma Takahiro, “Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: A Case of Altishahr in the Seventeenth and Eighteenth Centuries,” International Conference on “Xinjiang in the context of Central Eurasian transformations”, 財団法人東洋文庫、2015年12月18日

小沼孝博、「清朝と新疆のムスリム臣民相互認識と対話」、『東北アジア研究センター20周年記念シンポジウム「東北アジア—地域研究の新たなパラダイム」』、セッションB4「モンゴル史及び東北アジア史における大清国の歴史的位置」、『仙台国際センター会議棟小会議室3』、2015年12月6日

小沼孝博、「18世紀前半におけるトルファン社会の分断 エミン・ホージャ台頭の背景」、『第52回野尻湖クルルタイ〔日本アルタイ学会〕』、長野県信濃町藤屋旅館、2015年7月28日

Onuma Takahiro, “Administration and Migration in Khovd during the Late Qing Period: The Case of the 1838 Kazakh Invasion,” International Conference on “Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia”, Ulaanbaatar University、2014年8月9日

小沼孝博、「清末ホヴド地区における行政

と移住 1838 年のカザフ侵入事件とその影響」、東北大学東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成 26 年度第 1 回研究会、東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 4 階会議室、2014 年 6 月 14 日

小沼孝博、「清朝治下の東トルキスタンにおける政治権力と在地商人」、日本中央アジア学会・第 1 回江ノ島ワークショップ、神奈川県藤沢市 KKR 江ノ島ニュー向洋セミナールーム、2014 年 3 月 29 日

小沼孝博、「遊牧国家的資源利用：準嚙爾之農業与交易」、「民族史視角下的国家・人群与地域社会」學術研討会、復旦大学邯鄲校区光華楼東輔楼 103 會議室、2013 年 11 月 17 日

〔図書〕(計 2 件)

小沼孝博、東京大学出版会、清と中央アジア草原 遊牧民の世界から帝国の辺境へ、2014、311

David Brophy and Onuma Takahiro, The University of Tokyo, *The Origins of Qing Xinjiang: A Set of Historical Sources on Turfan* (TIAS Central Eurasian Research Series, No.12)、2016、282

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小沼 孝博 (ONUMA, Takahiro)  
東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30509378

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：